

聖書：コリント人への手紙第一 16：5～12

説教題：主がお許しになるなら

日時：2023年3月12日（朝拝）

先週からコリント人への手紙第一の最終章に入りました。前回の1～4節では「聖徒たちのための献金」プロジェクトに関することが語られました。パウロがコリントに行ってから集めることがないように、週の初めの日ごとにささげ、準備するようという話でした。ではいつパウロはコリントに来るのか。その彼の訪問計画が今日の箇所述べられます。パウロはすでにこの手紙の4章18～19節でこう述べていました。「あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところにいきます。」パウロはこの時、8節から分かりますようにアジアの都市エペソにいました。そこからエーゲ海を船で渡れば対岸の町コリントへ行くことができます。しかしパウロは今日の5節で「私はマケドニアを通過して、あなたがたのところへ行きます」と言います。マケドニアを通過してコリントへ行くとは陸路をぐるっと回って進むことを意味します。マケドニアとは第二次伝道旅行でパウロが宣教したピリピ、テサロニケ、ベレアなどの町々がある地方を指します。パウロはそこを通ります。もちろんこの意味は、その地にある諸教会への牧会的働きを行ってということです。パウロが心にかけているのはコリント教会だけではありません。このようにマケドニアの諸教会をも心にかけているパウロの姿があります。

そこを通過した後、コリントへ行きたい。そしてあなたがたのところで冬を越すことになるかもしれないと彼は言います。当時、冬は航海ができませんでした。ですから比較的長期間コリントに滞在することをパウロは計画していると言います。これはコリント教会の諸問題にじっくり関わり、取り組むためだったのでしょうか。この手紙にも記されて来た様々な問題の解決にはある程度の時間が必要だとパウロが考えていたことが伺われます。そして「どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです」と言います。これは次の旅に出発するために必要な備えをしてもらうことを意味します。反対者も多く、彼らの間にいる間は生活のサポートを受けなかったパウロでしたが、次の旅に出る時には必要なものを備えて送り出してもらえそうな望ましい関係になることを期待し、彼らへの信頼を表しているパウロの姿があります。

この計画を述べる際、パウロは7節で「主がお許しになるなら」という言葉をつけています。彼としてはこのように計画していますが、これは現時点の彼の考えです。主の御心とは異なるかもしれません。彼としては主がよしとされる限り、コリント人たちのところにしばらく滞在したい。冬の期間じっくり共に過ごしたい。しかし主の導きによって、それは変更となる場合があり得るということを彼は述べています。

このような計画を持ちつつ、パウロは今エペソにいました。五旬節まではここにいるだろうと8節で言います。すなわち春の終わり頃までここにとどまる。その理由が9節にあります。一つは「実り多い働きをもたらず門が私のために広く開かれている」からです。すなわち伝道の好機、チャンスが訪れているからです。ここの「開かれている」という言葉は完了時制で記されていますから、ある時点から始まったことがずっと継続しているというニュアンスを表します。パウロは「この機会をとらえて福音宣教に仕えたい。主がそのように導いてくださっている」と感じていました。しかしもう一つのこととして「反対者も大勢いるからです」と語られます。伝道のチャンスは同時に悪の力がより強く働く時でもあります。確かに使徒の働き 19章に記されているエペソ伝道の記録を見ると、人々が主への信仰を告白して魔術の本を皆の前で焼き捨てるといった現象が起こったと同時に、反対に「偉大なるかな、エペソ人のアルテミス！」と町中が叫んで大混乱に陥るといった反対活動・妨害活動も起こったことが記されています。こうした困難の中にある教会、そして信徒を守る働きもしなければならぬという使命をパウロは自覚していました。そのため今しばらくこのエペソにとどまらなければならないと彼は言います。つまりパウロとしては春はエペソ、夏から秋の初めにかけてはマケドニア、冬はコリント、そして来春には聖徒たちのための献金を携えてエルサレムへ、その後、新天地ローマ、さらにはイスパニアへという計画を立てたわけです。

10節以降は他の働き人とコリント教会の関わりについてです。ここからもパウロは一人で活動していたのではないことが分かります。コリント教会に関してもパウロはチームワークで働いていました。まず10～11節はテモテです。すでにパウロはこの愛弟子を遣わしていました。この手紙の4章17節でパウロは「私はあなたがたのところにテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です」と言っていました。パウロは今すぐコリントへは行けないので、テモテをパウロの代理として派遣しました。使徒の働き 19章22節にもそのことがこう記されています。「そ

ここで、自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた。」ここに二人を「マケドニアに」遣わしたとあるように、彼らも先にマケドニアを通り、それからコリントへ行くことになっていたのでしょう。しかしこのコリント人への手紙はエーゲ海の対岸にあるコリントへ直接届けられるため、手紙の方が先に到着すると考えられます。ですから、テモテが後でそちらに着いたら、これこれこのようにしてくださいとここで依頼がなされているわけです。

言われていることはテモテが心配なく過ごせるようにしてあげてくださいということです。パウロとしては案ずるところがあったのでしょう。テモテはまだ若い人です。コリント教会の手ごわい人々に軽くあしらわれる可能性が考えられます。ましてやパウロの代理としてテモテは赴きます。そのため、パウロに向けられる軽蔑や批判がテモテにそのままぶつけられてもおかしくありません。そこで慎重にここで配慮をお願いしているわけです。テモテもパウロと同じく主のみわざに励んでいるしもべです。そのことを思い、その働きのゆえに彼を重んじてほしいと頼みます。また「彼を平安のうちに送り出して、私のところに來させてください」とも願います。パウロはテモテが自分のところに戻って来てコリント教会の様子を伝えてくれることを待っています。その彼の出発時には必要なものを備えてやってほしいと依頼しています。

もう一人ここで述べられているのは 12 節のアポロです。彼はこの手紙の前半に名前が出て来た人です。コリント人たちは雄弁に話すアポロの魅力に取りつかれたようで、そのあまり誰につくかを巡って教会内に分裂・分派が生じていました。彼らはそれぞれ「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」などと言って争っていたことが 1 章 12 節に記されていました。この「兄弟アポロのことですが」という表現は、これまでの「～については」という表現と同じものですので、コリント教会からパウロのもとに届いた手紙にあったことを受けた表現と考えられます。つまりコリント人たちはアポロを遣わしてほしいという要望を書いてよこしたと考えられます。そのアポロについてパウロは「兄弟」アポロと言います。ここからもパウロとアポロの間に不和はなかったことが伺えます。コリント人が勝手に働き人たちを比較し、自分の好みによって対立させ、党派を作っただけです。パウロはアポロにコリントへ行くことを強く勧めました。もし不仲であったら、こんなやり取りはなかったでしょう。しかしパウロはアポロに全く信頼していました。彼がコリン

トへ行くことはコリント教会の益につながると考えていました。3章6節で「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」とあった通り、アポロはさらなる成長のために働きをしてくれるだろう、と。そこで兄弟たちと一緒にコリントへ行くように強く勧めたのです。しかしアポロが行かないと言いました。パウロが行かせなかったのではありません。なぜアポロが行こうとしなかったのか、その理由はここに書いてありません。おそらくそれはアポロが状況を判断してということだったのではないのでしょうか。コリント教会は自分を高く評価してくれる教会、大歓迎してくれる教会です。そういう意味で出かけやすい教会です。しかし今行くことは良いことにならないとアポロは判断した。単に都合が悪いとか、忙しいということではなかったと思われます。ここに「行く意志は全くありません」とあります。断固として今は行かないという判断をアポロはしていました。ここにアポロという人の賢明さをも見ることができるかもしれません。しかし良い機会があれば行くでしょうと彼は言います。これは一重にコリント教会の状態にかかっていることと言えるのもかもしれません。

以上の箇所から私たちは何を学ぶことができるのでしょうか。まずその一つとしてパウロの諸教会への心遣いと献身について教えられるのではないのでしょうか。パウロは今、コリント教会への手紙を書いています。彼がいかに心血を注いでこれを書き綴って来たかはこれまで見て来た通りです。しかしパウロの心にかかっているのはコリント教会だけではありません。マケドニアの諸教会のことも心にかかっています。そしてさらにこの手紙を執筆している時、パウロはエペソでの働きに奮闘していました。こんなにも多くの教会を同時に心にかけ、仕えているパウロの姿に思わず圧倒されまです。果たして一人の人にここまでことができるものなのでしょうか。そのことについてパウロは15章10節でこう言っていました。「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」確かに彼が言う通り、これは神の恵みがなし得た奇跡と言えるようなみわざだったのでしょう。神の恵みによるなら人はこのような働きができるということでもあります。そしてまた今日見て来ましたようにパウロは一人ではありませんでした。他の同労者との協力関係の中でこの働きを行っていました。その彼ら一人一人をも神が用いて、この働きが進められました。

今日の教会も同じであると思います。主に献身し、神の力によって仕えてくださった先輩の兄弟姉妹方、また今なおそのように仕えてくださっている方々の奉仕と労苦によって、今日の教会もこのように存在し、支えられ、養われています。私たちは主と先達たちと、今日も仕えてくださっている兄弟姉妹に感謝するとともに、自分自身もまた、そのように用いられることを願う者でありたいと思います。神から与えられている召しと賜物を再確認して、主の教会がいよいよ建て上げられるために、そして御国の完成に至るために、神の恵みの力によって仕え、みわざのために用いられる者でありたいと思います。

もう一つ思うことはパウロは今日の箇所では今後の計画を色々述べていますが、実際はどうだったかということです。実際は必ずしもこの通りではなかったようです。この後に書いたコリント人への手紙第二 1 章 16 節に次のような言葉が出て来ます。「すなわち、あなたがたのところを通過してマケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところへ帰り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。」これは今日の箇所では述べられている訪問順序と違っています。今日の箇所ではマケドニアを通過してからコリントへ行くと言われましたが、今読んだⅡコリント 1 章 16 節では、まずコリントへ行き、そこからマケドニアに赴き、またコリントに戻って来て、それからユダヤすなわちエルサレムに行こうとしたとあります。パウロはこのように実際には先にコリントへ行ったようです。そうせざるを得ない状況があったからと思われる。そしてその時のコリント訪問は大変つらいものとなったようでした。そして彼はその後の予定を一旦取りやめ、またエペソへ戻って来たようです。詳しくは第二の手紙を参照していただきたいと思います。こうした計画変更のためにパウロは批判され、彼は気まぐれだとか、無定見であるとコリント人からは揶揄されたようです。

このようにあのパウロも自分が一度立てた計画、また公に述べた計画を変更することがありました。しかしそれはあって良いことです。彼は 7 節で「主がお許しになるなら」という条件を自分の計画につけていました。これは主の介入によって自分はいつでも自分が立てた計画を変更する余地を持っていたということです。パウロは使徒であるからと言って、いつも最初からすべてを見通していたわけではありません。分かりやすい具体例として使徒の働き 16 章 6～8 節をあげることができます。第二次伝道旅行でパウロは西へ進み、アジアすなわちエペソに伝道しようと試みましたが聖霊

によって禁じられ、今度は北上してビテニアに行こうとしましたが主の御霊が許さず、結局トロアスへたどり着いた様子が記されています。右に行ってもダメ、左に行ってもダメ、さまようように進んでいたことがあのパウロにもありました。そうして彼はヨーロッパ伝道へと導かれて行きました。

私たち人間が知っていることはごくわずかで限られていること、そして主は他のもっと良い計画を持っておられるかもしれないこと、このことをわきまえることから来る柔軟性をパウロは持っていました。一旦決めた計画は最後までその通りしなければならない。そうでなければ良い証しにならないということはないのです。私たちはどんな計画にも「主がお許しになるなら」という条件を付けるべきです。この条件の下で絶えず御言葉と祈りを通して自らの歩みを再検討し、必要なら修正する。パウロはこの主の主権を認めてフレキシブルに対応する人でした。そしてそのような彼が用いられました。

私たちも同じです。自分の計画や自分の願いにこだわって、それを主に押し付け、それを主にさせようとするのがキリスト教信仰ではありません。そうではなく、主が最も良い計画を持って導いてくださっていることに信頼し、たとえそれが当初の自分の思いや計画と違って、進んでそれを受け止め、それに服して生きること。そのような正しい柔軟性をもって私たちも歩む者でありたいと思います。そして計画が変わっても私たちの基本的な生き方は変わりません。それは主の召しを受け止め、与えられている賜物を最大限に用いて、主と主の御国のために自らをささげて歩むことです。そうして主が備えてくださっている最善の道において御国を来たらせる働きの大切な一翼を担わせていただき、御名の栄光のために用いられる光栄な奉仕と歩みをささげ続ける者へ導かれたいと思います。